

と き 常 ち ょう 町 盤 町

唐古鍵に並ぶ坪井遺跡

当地名が文字で初登場するのは、南北朝時代・貞和三（一三四七）年の春日大社文書です。そこに南都・興福寺関係の莊園（領地）として「十市郡―常葉莊」の記録が見られます。

時代が下った室町中期・応永一六（一四〇九）年の興福寺関係文書に初めて「常盤」とみえるほか、さらに下った天正八（一五八〇）年に織田信長へ提出した同時関係領地の一覽書にも「十市郷―常盤領」とあり、このころまでに当地名の「常盤」が定着していたと考えられます。

江戸時代に「常盤村」と呼ばれた当地は、はじめ旗本・鈴木氏の知行地となったあと郡山藩領を経て幕府領となり明治時代を迎えています。明治二二年に耳成村の大字になり「檀原市常盤町」となったのが昭和三十一年です。

当町の東南部から隣の桜井市大福にかけての帯で昭和五六年、県立耳成高校建設に伴う発掘調査で「坪井遺跡」が見つかります。同遺跡は、大和を代表する田原本町の唐古・鍵遺跡に並ぶ弥生―古墳時代の大集落跡とみられ、数次にわたる調査で集落を囲む環濠（みぞ）に井戸や墓地が掘り出され、人骨が残る木棺をはじめ絵画土器や多数の木製品なども出土しました。弥生から今に続くのが「常盤町」です。